

地球儀のところどころにある溺死

まちりこ

埼玉県

地球儀の青い部分はすべて海で、美しく塗装してある。目の前にない海の「内訳」を考えた際、どこに何が含まれているのか。地球儀も本物も美しい海の中に眠るものは、生き物の死である。目には映らない「溺死」の気配が満ちる。

額縁は窓だ

ゴッホの網膜が

レースカーテンみたいに揺れる

高松 瞳

東京都

「額縁」と「窓」は、具体そのものを指すだけではない。意識や価値観、視点など、際限なく広がるこの世に枠取りを設けている。ゴッホの絵は、彼だけが持つ枠取りによって切り出されたもの。ゴッホ・アライブ展のことだろうか。動く絵の受け取り方が面白い。

全員が二倍速のこの街で

蟻を踏まないように生きてる

橋口 諒介

東京都

「二倍速」といえば、動画なら見落としてしまう部分も増える速さ。そこも了承した、いかなれば大枠のみで良いという認識で成り立つので、ディテールは見えない。その人々の中では静止画のようにさえ見える作中主体と蟻たちの存在感。輪郭の濃さを思う。

催促を

けんけんばして

逃げる兄

余剰な卵

福島県

何を「催促」されているのだろう。借金の返済、期限切れの提出物など、とにかく何かに追われている。けれど、隠れたり苦しみの中で逃げるのではなく、「けんけんば」で遊びながら逃げる。どんな状況でも、軽やかに生きていく。

ヘッドフォン

塞がれるまで月だった

小里京子

北海道

ヘッドフォンを着ける。塞がれる前、身体に穴が開いた状態のときが月であったなら、今は何なのだろう。外界から一つの器官を遮断する際、塞がれたのは、耳か眼か、それとも心か。刺激から自身を守るためのツールを手にすることで失う唯一性なのかもしれない。

鱗削ぐこんなに銀河つけてきて

斎藤よひら

京都府

雨の中を帰宅した人に「こんなに濡れて…」なんて声をかけることはままあるが、「銀河つけてきて」は誰も経験したことはないだろう。銀河をはらってあげる、という愛情を持ちながら、魚の身体を一心に削っていく。鱗の飛び散る情景が美しいほどにその暴力性が眩くひるがえる。

発熱で震えれば震えるほどに

輪郭のなか星空づくり

五月閉じ花

北海道

震えるとき、身体の輪郭を強く感じるのはなぜだろう。怒りでも寒さでも、喜びでも。鉛筆で何度もなぞったかのように乱雑に重ねられた輪郭線がぶつかり星々が生み出され、身体の中に落ちてゆく。私たちの体の中は夜空が詰まっている。

春の雨ほのかに甘い粉葉

加那屋こあ

東京都

水と粉葉はイメージが付きづらいかと思ったが、けぶるように降る春の雨だけは特別にそう見えてしまう。植物や建物、人なんかを覆ってゆく白い気配。作品では粉葉の味にかかっている「ほのか」だが、春の雨によって物の輪郭が淡くなる視覚的効果も含まれている。

豆を投げパパを返せと

泣いていた

幼いままじゃなくて、よかった。

金光 舞

埼玉県

幼少の頃、鬼ではなく、「パパ」が返ってこないかもしれないことへの恐ろしさを感じていた。大人になった今、返ってこないものなんてたくさんある。けれど、泣いて豆を投げるだけの無力な子供ではなくなった。節分の日を懐古している。現在までの時間が、今の自分を立たしめている。

めがさめて

わたしになるまではすもも

斎藤よひら

京都府

眠っている間に自分がどんな姿になっているかは誰も確認できない。目覚めた直後、微睡んでいる間は、自分の知っている姿に戻るまでの何物にも属さない浮遊した時間である。だから、自分が望むどんな姿になってもいい。その後の「わたし」を生きるために。